

2010年
6月23日
水曜日

平山健二郎 教授(金融論)

行動健康経済学

学です。

タバコが身体に悪いことはよく知られています。タバコを吸うという喫煙には2つの意思決定が関わっています。第一に、喫煙は「時間上の選択」と言えることです。タバコを吸う人は喫煙によってストレスが解消されるとか、気分が一新するという効用を評価します。しかし一方、長年の喫煙行動は将来の健康をむしろばみ、病気を得て、将来大きな不都合に直面するかも知れない、ということもある程度知っています。愛煙家は現在の小さな効用と将来の大きな効用との間の選択問題に直面しており、合理的に考えれば禁煙すべきと分かっています。目の前の小さな効用を得ることを選んでしまっていると言えます。

第二に、喫煙は「リスクの下での選択」という側面もあります。タバコを吸えば将来、肺がんや気管支炎の発病リスクが高まりますが、それ

は確率的な現象であり、喫煙者がすべてこれらの病を得るわけではありません。しかしそのような病気のリスクが高まることは確実であり、リスクをどう評価し、選択するか、という問題が関わってきます。

前者の問題は「時間選好率」といういわば主観的な利子率のようなものと深い関係があります。今日100万円を誰かに貸し、1年後に120万円にして返してくれるなら満足だ、という人は時間選好率が20%です。この人にとって1年後の120万円は現在の100万円と等価値です。時間選好率の高い人ほど現在を好み、将来を軽視しています。そのような人は今日我慢すれば、遠い将来には健康な身体という便益を得られるのに、それを軽く見て、目前のタバコとかアルコールに手を出してしまうのです。禁煙やダイエットに失敗する人というのはまさにそのような人たちになります。

ところで行動健康経済学はそのような分析はしますが、どうすれば時間選好率を低くし、将来のために我慢が出来るようになるかは教えてくれません。もしそんなことが簡単にできるのであれば、世の中から肥満をなくすることができそうですが、世の中にはそんなに甘くありません。

後者のリスクの問題は人間の危険回避度と関わってきます。もちろん喫煙をする人は危険回避度が低く、健康被害のリスクを軽く見ています。アンケート調査や実験などによって禁煙出来ない人は危険回避度が低いことも分かってきました。ただし、ここでも行動健康経済学は危険回避度を上げるために人間は何が出来るとは教えてくれません。悪しからず、ご了承下さい。

2年前のこの「経済と人間」シリーズでは「行動健康経済学の誕生」と題して、新しく誕生した行動健康経済学を紹介しました。今日はその応用である「行動健康経済学」という分野について少しお話しさせて頂きます。ここに依田高典・後藤励・西村周三著『行動健康経済学』という本がありまして、この本で読んだことを簡単に紹介したいと思います。

伝統的な経済学では自分の利益になるのであれば、そのための費用を勘案して、つねに合理的に行動するのが人間だと想定されています。しかし実際には、健康のためには禁煙すべきだとか、食べ過ぎない方が良いことが分かっているのに、そうでない人も多いのではないのでしょうか？そのようなきわめて「人間的」な行動をありのままに見据えて経済行動を分析しようというのが行動健康経済学であり、さらに健康に関わる経済行動を分析するのが行動健康経済